

## チベットの旅とデモ騒乱事件

——最近のチベット旅行に重ね合わせて——

エッセイスト 近藤節夫

### 一、チベットへの好奇心

俄かにチベットが騒がしくなってきた。中国・チベット自治区ラサにおいて、チベット民族の人権抑圧に抗議するデモが発生して以来、チベット人居住地域は不穏な空気に包まれている。

筆者が純粹にチベット高原の旅を楽しもうと平穩なチベットへ旅してから、まだほんの三ヶ月しか経っていない。あんなに静かで仏教僧の行き交う落ち着いた町だった省都・ラサが、暴徒によつて荒らされるシーンをテレビで、ただ黙って見ているのは何ともやりきれない思いである。

巨額の資金を注ぎ込み国家プロジェクトとして世界へ向かつてPRした、青海チベット鉄道（青藏鉄道）の最大級の効果が表れ、開通以来つい最近まで世界中から多くの観光客がチベットを訪れていた。それが三月一四日のデモ発生以後、中国政府の腹積もりは大きく狂い始め、中国政府にとつては心ならずもチベット自治区への立ち入りを一時禁止する事態にまで発展してしまつたのである。中国政府はチベット人弾圧を憂慮する世界中の人々が疑心暗鬼で見守る中を、「荒れるチベット人暴徒を取締り、各地の治安は漸く平靜さを取り戻し、街は落ち着いてきた」と独善的な見解を発表し、自国の立場をアツピールしている。いま世界中がこのチベットの緊急事態を固唾を呑んで注視しているのである。

それにつけても、つい最近見たあの自然がいつぱいの大地、紺碧の空、そして赤いほつぺをして目の澄んだあどけない子どもたちや、河口慧海も修行したセラ寺の修行僧たちは今ごろどうしているだろう？。毎日伝えられてくる混乱のチベット情勢には、心穏やかならぬものがある。テレビ画面でデモ隊が暴れ、軍隊や警察が鎮圧しようとしている光景を見るのは何とも寂しく辛い。鬱積した気持ちの中には耐え難い不満や憤怒を感じるのも事実である。

近年になつてチベット、いや何よりも念願だったポタラ宮殿へ行ってみようと本気で思い立ったのは、子どものころからのシャングリラのような遠い夢の実現と、鉄道開通というひとつのきっかけがあつたからにほかならない。

初めてチベットの省都、ラサの世界遺産「ポタラ宮殿」の神々しい姿に触れたのは、まだ「元氣活発な中学生だったころのことである。雑誌か、絵葉書であるの壮大な建造物を初めて目にした。大きな夢を抱かせるお伽噺のような、こんな立派な宮殿が町のど真ん中に屹立する不可思議な光景を信じられない思いで見ている。果たしてこんな建物が本当にあるものだろうかと思案にとられたものである。

しかし、それは次第に大きな好奇心となり、不思議に少年の心を掴んでいった。そのころはまだチベットという地名もあまり馴染みのあるものではなかったが、地理好きの少年にとつては、

ヒマラヤ周辺のネパールやブータンと並んで一際強い好奇心と関心を呼ぶ魅力的な土地だった。そのポタラ宮殿を見て、出来るものなら、いつか一度は訪ねてみたいとの思いが募り、チベットの地はロマンとなり憧れとなって、中学生以来今日まで六〇年近くに亘り夢は膨らんでいった。

それが一昨年七月、中国青海省省都・西寧とチベット自治区省都・ラサ間、一九五六kmの高地に想像も出来なかった青藏鉄道が開通し、誰もが苦勞をせずにチベットへ行けるようになった。そのことは筆者にとっても、チベットの旅へのモチベーションを改めて刺激する大きなきっかけとなった。

本稿では、ひとりの旅人として昨年一二月末訪れたチベットの旅で、純粹に感じたチベットの旅事情と、最近発生したデモから見えてくる中国とチベットの関係に注目してみた。

## 二、標高五千米を越える青藏鉄道

チベットへの玄関口・西寧は、チベット自治区に接する、山また山の標高二二六一mの中国奥地にある青海省の省都である。昨今急速に賑わいを見せるようになった他の中枢都市群に比べてみても、明らかに都市開発が遅れているのが分かる。市街にはソンコ帽を被ったイスラム教徒の姿がしきりに目につく。この「田舎の省都」西寧が青藏鉄道の始発駅となつてから、チベットへ草木がなびくが如く中国国内は言うに及ばず、世界各地から観光客がどっと押し寄せるようになり、街の様相は一変した。西寧駅は総ガラス張りの近代的なビルに改装され、空港も昨年四月に新装オープンした。チベットへの門前町、西寧には東の間の市内観光を楽しむ観光客がどっと押しかけ、市内のイスラム寺院・東関清真寺や、チベット仏教六大寺院のひとつ、タール寺を慌しく駆け巡るようになった。

標高五〇〇〇mを越える鉄道を建設する国家プロジェクトの実行に当って、企画当初から資金調達と工事難航が予想され、実際調査開始以来開通までほぼ半世紀の時を要している。それが二一世紀に入るや驚異の突貫工事により瞬く間に完成させてしまったのである。

西寧駅を夜八時過ぎに出発して、列車はチベット・ラサへ向かってひた走る。ラサ到着は二六時間余をかけた翌日の午後一〇時半である。このダイヤが二日に一回運行されている。夜間に西寧駅を出発するのは、走行中乗客が車窓から風景を眺められる時間を出来るだけ多く取って乗客に珍しい高山、高原、万年雪、湖水、野生動物をゆつくり見せてあげたいとの配慮から設定されたダイヤということを考えても、運輸当局が乗客への観光サービスを気にかけている気持ちが汲み取れる。

列車編成は気動車、貨物車を除くと、食堂車を含めて一五両が乗客のサービスに供せられている。乗客総定員は九三六名で、このうち一等車の軟臥車ではコンパートメント(一室上下二段ベッド室に四人)車が二両牽引されている。一等車は定員六四人からなり、二等車(硬臥車)はコンパートメント(一室上下三段ベッド室に定員六人)車が八両牽引され定員四八〇人、そして、座席構造の三等車(硬座車、定員九八人)が四両連結され、定員は三九二名となっている。

第一期工事により、一九八四年に開通したゴルムド(標高二八三〇m)は、この青藏鉄道沿線に

おける商業の中心地で、仕事を抱えた中国人の乗降が多い。同室だった中国人営業マンも朝七時になるや筆者に一声かけて慌しく降りていった。ゴルクム下駅に到着した列車は、高山用で馬力の強い三重連の米国製機関車に付け替え作業をして、いよいよ標高四〇〇〇級の高地への挑戦となる。まだ朝暗い中を岩肌の突き出た重畳たる西遊記のふるさと、崑崙山脈に沿って列車は走る。最高峰は万年雪の残る玉珠峰(標高六一七八m)で、トンネルあり、鉄橋ありの難工事だった区間が続く。崑崙峠(標高四六八六m)を越え崑崙トンネル(全長一六八六m)を抜けると鉄橋を渡る。その数は実に六七五橋で、総延長一六〇kmというから凄い。

一年中残雪が見られる高地では、当初から工事は難航が予想され、凍土地帯に敷設された線路の道床を、いかに夏の暑い気候から凍土の融解を防止して道床が緩むことを防止するかということが大きなテーマだった。そのために熱棒といわれるアンモニア水を含有した鉄パイプを深さ地中五m、高さ地上二mに等間隔で埋め、地中の熱を外へ発散させる工夫を凝らしたという。鉄橋の橋脚はさらに深く、地下三〇mまで掘り下げたというから、列車の運行のための科学的研究と難解な作業工事が、開通後の列車運行の安全を担保していると言える。

何よりも列車の旅の魅力は、世界にも珍しい広大な自然をじっくり見せてくれることである。乗り心地も申し分なく、一昼夜以上の長い乗車時間にも拘わらず、車窓の景色には飽きることはない。乗車中はほとんど四〇〇〇m前後の高地体験をしながら平地では見られない、思いがけない風景に感激も一入である。玉珠峰駅(標高四一九五m)辺りから、徐々に高度を上げ六〇七〇〇m級の険しい山岳地帯を車窓の左右に眺め、四〇〇〇m級山岳地帯の中を列車は走る。鉄道に平行して一本の国道、青藏行路がずっと続いている。中国国内からチベットへの物資輸送はこれまで空路を除くとこの道路一本に頼ってきた。七世紀に建国されたチベット王国のソン・ツェン・ガンポ王の許へ嫁いだ、文成公主が長安からラサへ三年の時をかけて辿った当時の道と、それほど隔たつてはいないと言われている。その当時からチベット人にとつての命綱がこの青藏行路だったのである。今ではその立場をこの青藏鉄道が取って代わり、物流の面でもチベット経済に貢献する大動脈となっている。

しかし、青藏鉄道を将来の観光開発だけのために、或いは一步拡大して物資輸送のためと考えても、まだ経済力の伴わなかった当時の中国がこれほど過大な投資をしてまで辺境へ鉄道建設する意味はあっただろうか。鉄道建設の本当の目的は何だったのだろうか？ 勘ぐれば、この鉄道建設はもつと大掛かりで、遠大な目的のために計画されたのではないだろうか。辺境の地・チベットは国家防衛上、軍事上の防備を固めなければならない。民族も異なり、いかに高地にあつて軍隊による越境侵略は至難とはいえ、後背地が無防備な中国にとって、敵の攻撃から無防備のまま放置しておくことは出来ない。この点に一計が及んだ時、中国は早めに防備を講ずることの必要性に気づき、そのための軍需物資輸送のルートとして、この青藏鉄道を建設することに行き着いたと考えられないだろうか。車窓から黙って青藏行路を走るトラックを見つめていると、そんなことが想像されてくる。

やがて、長江の源流に近いトト河(標高四五四七m)を渡り、二時半ごろにはこの旅行のハイライトであるタンングラ峠駅(標高五〇六八m、駅の左手前)には標高五〇七二mを表示する石碑

が建っている(を通り過ぎた。あつという間だった。いかにも早過ぎてわくわくするような情緒に浸っている間もない。勝手を言わせてもらえば、もう少し徐行して標高五〇〇〇Mの天空の世界の余韻に浸らせてくれないかとお願ひしたい。もっとも将来観光客が増えた場合には、すでに完成した駅に一時停車する計画があるという。

しかし、何と言つても自分が標高五〇〇〇M地点にいるというのは、言い知れぬほどの高揚感(實際脈拍が一気に「一一八」にまで上がった。グラフ参照)があり感動的でもある。滅多にない体験的臨場感である。地球上の六〇数億人の中で、いま自分より高いところにいる人間はどれだけのいるだろうか。オッチョコチョイのブッシュだって、冷徹なプーチンだって、あの悪党金正日だって自分より遥か下界でぼそぼそ生きているではないか、「鬼さんこちら……」とからかいたい気分ではいるとまさに爽快で、こればかりは「こ」でなくては味わえない痛快さである。

やがてまだ太陽の明るい中で、午後五時過ぎにチベット遊牧民の町、チベット自治区最初の停車駅であるアムド(標高四七〇二M)を通過して、やがて右手前方に最高地点(標高四五九四M)の湖、澄明なツオナ湖が見えてくる。琵琶湖の三分の二の大きさの「聖なる湖」では湖水二〇Mまで近づいて湖畔を二〇分かけて走る。中国大陸の広大さにはただ呆然として言葉を失う。

標高四六〇〇Mの「コシリ自然保護区は北海道とほぼ同じ面積を有する」で「かさ」である。この自然保護区内を走り抜けると、珍しい高地特有の一級保護動物で北京五輪のマスケット、チル―ヤチベット・ノロバ、チベット・ガゼル等の野生動物群が思いがけず目に飛び込んでくる。チベット特産の牛科のヤクが、チベット遊牧民に伴われ放牧されているのんびりした光景もしばしば見られる。静かなものばかりでなく、動的な自然の生き物を見ることが出来るのもこの旅のもうひとつの魅力であろう。

乗客の風俗や旅行スタイルに興味を持ち列車内の探訪に出かける。やはりチベットの人びとが乗り込んでいる硬座車四両の人間くさい姿が面白い。車両はすべて通路を挟んで左右二席と三席に分けられ、車両はすべて満席で息苦しいくらいである。座席に座り続けたまま長い旅を続けるのは、かなり疲れるに違いない。ほとんどが家族連れで、中でもお年寄りが多く、身にまとっているのはチベット人独特の民族衣装である。まどろんでいたり、床の上に寝転んでいたりと、トイレの前の僅かなスペースに座り込んだり、流石に長い旅路に時間を持て余している乗客が多い。読書や新聞を楽しんだり、今どき日本で流行っているゲームを楽しんでいるような人間はひとりもない。家族連れの写真を撮ってあげるとみんな気さくにポーズをとってくれ、喜んでくれたが、こんなところではプリントしてあげることが出来ない。でも素朴な人たちの温かい雰囲気、直に伝わってくる。じつと幼い子どもたちのあどけない顔を見ると、彼らの皮膚が随分肌荒れしているのが分かる。ほっぺがリンゴのように真っ赤であるが、肌に艶がないのだ。こればかりは大人も子どもも同じで、乾燥した高地で生活していると肌をよほど念入りにケアしないと自然に荒れてくる。列車内で会話したチベットの人たちの皮膚の表面には、明らかに典型的な肌荒れ現象が表われている。彼らは知ってか知らずか、愛想のよい笑いを見せてくれるが、ちょっと気の毒になった。

列車内は全車両とも空気が密封されて、航空機と同じように気圧を適度に保つ装置が施され

ている。それでも密封したチューブの練り歯磨きや、チューブ入りのハンドクリームは、蓋を外すと内部から液状のクリームがぴゅつと飛び出してきたり、密封包装した煎餅の包装バラフィンが膨らんで丸くなったり、普段地上では考えられない異常な現象が見られた。筆者の左右両手指一〇本にも、指先から第一関節まですべてにひび割れ、アカギレという小学生時以来の珍現象が表われ少々慌てた。

食堂車でコックさん自慢の中華食をいただくのも中々味わいのあるものだった。だが、かつて成昆鉄道の食堂車内で食べた中華料理に比べて格別旨いという感じはしなかった。なぜだろう？ 少し味が落ちるようだ。早速コックさんに聞いてみた。するとどうだろう？ どうやら調理にも高地の影響が出ているらしい。調理に圧力釜を使用していると聞いたが、それでも平地の調理に比べて三倍の時間がかかるという話だった。これまで南米ペルーや、ヨーロッパアルプス、アメリカ・ロッキー山脈などの高地旅行では、気圧や、乾燥した空気、酸素量などについてあまり深刻に考えることはなかったが、連日高地に滞在するとなると、今後は年齢（六九歳）を充分念頭に入れておく必要があることを認識させられた。

列車は、夜の一〇時半に予定通り、素朴なチベット文化とは異質のピッカピカのラサ駅（標高三六五〇m）プラットフォームへ静かに入って来た。駅構内は人が少なく、ただ広い構内を列車から降りたチベットの人びとが大きな荷物を背中に背負い、唯一混雑する改札口を通り抜け、いつの間にか真っ暗闇のラサの町へ消えていった。

三、高山病対策は欠かせない。

明けてラサの朝は、前日の疲れからかゆつくり目を覚まし、ホテルの窓から街を覗くと外はまだ薄暗い。通りにはかなりの人の動きが見える。もうとつとくに街の活動が始まっている時間である。

どうしてラサの朝はこんなに暗いのか。

中国では、全土で首都の北京時間を採用していて、このチベット自治区の省都、ラサでも北京時間で動いている。ところが、地勢上北京とラサの間には東経で約三〇度の開きがある。ということは、北京より西方に位置するラサは、経度一五度で一時間の時差を調整する原則から行けば、本来北京より二時間遅らせてちょうどよい。それにも拘わらず、中国では中国全土で無理やり首都・北京に合わせたローカルタイムを中国統一の時間としているために、西方へ行くほど正常な時間からずれて朝も夜も遅い現象が見られる。これが、朝のラサが薄暗く、夜の帳がなかなか下りない原因である。

ラサは富士山と同じく高い高地にあり、空気が乾燥して酸素は平地の約六割と言われている。チベットに生活する人びとは小さいころより、この酸素が希薄で乾燥するチベット独特の気象に少しずつ身体を慣らし、この厳しい自然環境に馴化してきた。その瑕疵のひとつが、前記したような肌荒れ現象である。こればかりは厳しい自然環境に馴染む過程で背負った現代チベット人の宿命でもある。

筆者はこの旅行中血圧計を持ち歩き、毎朝定期的に「血圧」と「脈拍」を測った。それが別表のグラフである。血圧については、「高」「低」とも若干の変化に留まっていたが、脈拍の数値変化の極端な上下動には驚かされた。脈拍について言えば、これまでコンスタントに「六〇」前後を記録していた。標高五五五の北京では、日本国内の脈拍数と変わらない。それが、翌日列車に乗り四〇〇〇m前後を走り、標高五〇〇〇mを超えた時点で再計測したところ、一気に「一一八」にまで跳ね上がったのである。その後、四〇〇〇m近い高地で滞在していたチベットでは、終始脈拍「一〇〇」を超えていた。そして、再び北京へ戻り、計ってみたところ平常値へ戻った。明らかに気圧と希薄な酸素に影響される高山病特有の現象である。

実際、グループ同行者一八人のうち、チベット滞在中の五日間に高山病現象によりホテルで医師の診察を受けた旅行客が六人いた。そのうち二人は点滴治療を受け、まもなく元気を回復した。過去の統計からもチベット旅行者のうち、三人にひとりには高山病に罹り、せつかく楽しみにしていた旅行を不本意なまま帰国せざるを得ない不幸せな結果に終わっている。

奇しくも本年一月チベット自治区は日本大使館に対して、チベットへの日本人旅行者に対して注意を喚起するメッセージを送った（一月一八日付日経新聞）。それによると昨年五月から半年間にチベット近辺で高山病により亡くなった日本人旅行者は八人で、そのうち六人が六〇歳以上、最高齢が八八歳だったという。世界の観光地の中でも、これだけ多数の旅行者、とりわけ中高年者が土地特有の自然環境に影響を受け、健康を害した地域は他にはない。

高山病はこれまでの海外旅行ではよほど特殊なケースを除いて、注意を促されることはなかったが、いまや自分の足を使わなくても、便利な輸送機関により容易に環境の激変する目的地へ連れて行ってくれるようになった。新しく珍しい土地へ、心身ともに健康であれば行けるようになったが、そこには簡単に行ける点に大きな落とし穴が潜んでいることを充分心得るべきである。

この旅行中に高山病対策上注意されたことは、①長い時間熱いシャワーを浴びない②アルコールを控える③激しい運動は控える④水分補給を心がける、だった。

想像以上に厳しい自然環境と自分の健康を充分考えて旅行しないと、取り返しがつかなくなる恐れがあることを、この高地チベット旅行は警告していると捉えることが大切であると実感した。

#### 四、チベット観光は砂上の楼閣か？

##### (一)漢民族の蔑視に苦しむチベット民族

青藏鉄道による標高五〇〇〇mを超える幻想の世界の旅から、「秘境の旅」のようなツアーに至るまで、チベット文化と自然に触れる旅の誘い文句に惹かれ、近年多くの外国人旅行者が高地チベットを訪れるようになった。

確かに秘境と呼んでもよいチベットには、言い知れぬ沢山の魅力が秘められている。それは自

然に囲まれた牧歌的な環境と、そこに暮らすチベット人の素直で純朴な民族性が醸し出す旅情である。加えて、類稀なチベット仏教の伝統と風習を内包する奥深いチベット文化である。それらが一体となって、一口では表わせないチベットの魅力を創り出してきている。

時代の変遷に連れ保守的な文化も少しずつ外部の影響を受け、徐々にではあるがその精神と本質が変わりつつあるのも、近代社会にはびこる一般的な弊害と言えるのかも知れない。その中で古来の伝統文化を日常生活の中心に据え、心の平安をそれに委ねているチベット人の生き方には、その底流に頑固なまでのチベット仏教への信仰心が腰を下ろし、心の中にチベット仏教への篤い信仰心がしっかり根ざしている。

省都・ラサのみならず、チベットの街角では橙色の衣をまとった多くの僧侶の姿を見ることが出来る。一家にひとりとは仏道へ進む彼らにとっては、素朴でありながら過酷なまでの修行を積んで仏様へ帰依を誓い、自らを仏へ近づけようことを真摯に祈願するのである。

チベット王国の誕生は古く、その起源は紀元前二世紀にまで遡る。七世紀にソンツェン・ガンポがチベットを統一して吐蕃王国を建国し、そのまま現代のチベットまで歴史と伝統が引き継がれている。その吐蕃王国も八世紀半ばには長安を支配下に納め、強大な勢力を誇っていたが、長くは続かず、九世紀半ばには崩壊した。一〇世紀以降チベット仏教各宗派が政治的、社会的に統治支配する特殊な支配体制が確立されたが、その過程で密教的な色彩を帯びたチベット仏教（一部にラマ教とも呼ばれる）が定着した。チベット仏教はその後四つの宗派が誕生してそれぞれに発展した。その中でも最も新しいゲルク派が今日最大の力を持ち、観世音菩薩の化身として活仏と呼ばれるダライ・ラマが代々宗教的、政治的指導者としてチベット民族を率いてきたのである。その間一七世紀にポタラ宮殿を完成させ、それがダライ・ラマの官邸となり、日常生活の居城ともなつて、全チベット民族にとり精神的支柱として大きな影響力を与え続けてきた。今日でもチベット仏教やチベット文化のチベット人に及ぼす影響は、計り知れないほど大きいものがある。

いまこのような状況下でチベットの伝統的な文化遺産が少しずつ失われ、形を変えつつある。現在中国政府は巨額の開発投資をしてチベット自治区の経済開発を行っている。その狙いは生産性の低いこの地域で、大都市並みに対前年一〇%以上の成長率によって生産性を高め、地域全般の生活レベルを引き上げ、相乗的な経済効果を高めようとの目論見である。とかく新興国の経済発展の過程で見られるように、このプロジェクトも必ずしもプラス効果ばかりをもたらすわけではなく、背中合わせにマイナス効果もはらんでいる。その兆候はチベット社会における土着体質の伝統が、非効率、不経済としてことごとく無駄、或いは非生産的と否定され、社会から切り捨てられる傾向にあることである。その最大の標的と見られる象徴が、チベット民族の心の支えであるチベット仏教であり、チベット文化なのである。

中国革命以来宗教とは一歩距離を置いてきた中国共産党にとって、宗教勢力は国家の発展、繁栄にとって必ずしも有益とは見られていない。国是とは相容れず、いかに長い歴史を誇り信者の篤い信仰心があろうとも、国家の経済発展にとって益なしと看做されれば、何もかもが忌避される命運を辿る。チベット仏教は今日の中国首脳の日には、まさに一益も映らないのである。

こうして、一介の旅行者である筆者の目には、三ヶ月前には露ほども感じられなかった矛盾と異変が加速され、いまチベット自治区と周辺のチベット民族居住地域で、現実に自由と人権を求める具体的な形として忽然と浮かび上がってきたのである。

筆者がこの旅行で見聞したチベット人の素顔からは、中国によるチベット自治区における自由と自治の抑圧は表面上格段気になるものとは思えなかった。しかし、いま報道されるマスメディア情報を蒐集し、翻って最近の中国とチベットの交流について精査してみると、両者の関係は決して友好的ではないと考えざるを得ない。その底流には何よりも根源的に漢民族によるチベット民族に対する蔑視の長い歴史があり、今日もなお残っているからである。

それはいくつかの報道テレビ番組でも紹介されたが、とりわけ昨秋NHKが中国を取上げたあのシリーズ番組で、ラサ市内に開業間もない高級ホテル「雅魯藏布大酒店(ヤルツァンポ・ホテル)」の、中国人オーナーの金権趣味丸出しの商魂と、チベット人に対する侮蔑的な対応に象徴的に表われている。

旅行中筆者は偶然そのホテルに滞在することになったが、最新のテクノ技術を採り入れたホテルの建築構造は明るく豪華で、一見して機能的でもあった。初めてロビーへ足を入れる時、チベットの民族衣装を来た女性からチベット風に肩に「ハタ」をかけられ、民族楽器で迎えられるパフォーマンスは、ゲストの気持ちを読んだ心憎いばかりの演出だった。表面的には充分ホスピタリティ溢れる歓迎ぶりだった。新しいホテルはラサ市内の若者の雇用を確保し、観光需要に相乗的な効果をもたらしてくれ、チベット自治区に相当な経済効果も与えてくれたと評価したい。

しかし、ラサでこのデラックス・ホテルに滞在している間に、個人的に気にかかる嫌な面を二つも覗いてしまった。

そのひとつは、このホテルのオーナーが横柄な態度で煙草をくわえた傲慢な顔写真を、ホテルのリーフレットの最も目につく表紙に掲載し、それをロビーに所構わず置いておく無神経ぶりと、ホテルマンとしてのセンスの欠如である。裏方であるべき人間にも拘らず、自らをひけらかす成金趣味が露骨に感じられ決して良い印象が持てなかった。

二つ目は、前記テレビ番組で厳しい勤務評価による給与査定の場合に登場した、あの冷徹そうな支配人らしき中国人女性が、偶々ロビー内を歩いている光景を目撃した時だった。その場で演じられた、あまりにも不遜なパフォーマンスと、従業員の卑屈な態度が交錯するシーンを垣間見て愕然としたのである。その時女性支配人らしき人物は何をしたか？ ただロビー内を颯爽と横切っただけだったのである。だが、周囲の空気はそんな生易しいものではなかった。ぴりつとした緊張感で辺りは張り詰めた空気に一変したのである。チェックイン・カウンターをはじめ、周囲にいたチベット人ホテル従業員は、恐懼して全員すくくと起立し「支配人らしき女性」様のお通りを恭しく見送ったのである。彼らの眼中には宿泊客の視線なんてまるでなかった。単なる社内の上下関係ではなく、そこにあるのはかつての前近代的なインドのカースト制度にある、貴族と不可触民の関係だった。そんな不愉快なパフォーマンスを公的な場で堂々と演じて見せてくれた。筆者には久しぶりに見えてはいけけない前世期の遺物を見たような印象を受けた。

「二つ」いう陰湿な空気は、傲慢な成金中国人に対する、チベット人従業員の劣等感、屈辱感、卑下、嫌悪感、敗北感、諦め、恐怖心、憎悪、反抗心を徐々に育み鬱積させていくに違いない。そして、成金中国オーナーは、ラサ市内のありとあらゆる骨董品店や旧家を訪ねては、由緒ある工芸品や家宝を買い漁っている。さらにチベット仏教の伝統行事までを自らが経営するホテルで執り行うべく、自ら寺院へ足を運んでまでして僧侶を説得するのである。結局金の力で僧侶から時間が許せば仏教行事をホテルで行ってもよいとの約束まで取り付けてしまふ。観光開発中のチベットでは、ツーリズムに不慣れなチベット人の気持ちを斟酌せずに潤沢な資金を注ぎ込み観光開発を押し進め、またチベットの観光振興のためと言っては伝統と文化を変質させることまでして、チベット社会の基盤であるチベット文化に自壊作用を起こさせているのだ。こんな卑しいことまでして、果たして観光開発の意味や必要性があるのだろうか。

注視してみると、今日チベットにはすべてを「金」で処理しようとする外部からの露骨な金権主義が侵入してはびこり、一部の金持ち中国人が伝統的なチベット文化をどんどん破壊している。

皮肉なことに物質面でそのお先棒を担いでいる最大の原因のひとつは、こともあろうに青藏鉄道である。実は、青藏鉄道開通はその実利性や経済的効果のゆえに、露骨なチベット文化の流失と破壊の一因ともなり、反って全チベット人が必ずしも全面的に歓迎していない傾向が見られる。それは本来悠久不変のチベット文化と相容れないものだからである。鉄道は中国によるチベット文化の破壊を助長していると考えられているのである。確実に、かつ迅速に中国から物資を輸送して、チベットの中国化を推進し、チベットの経済力向上に寄与する一方で、チベット文化を中国へ運び出し、チベット文化の空洞化に積極的に手を貸す役割を果たしている。これが、チベット文化の破壊を憂慮する人たちの青藏鉄道に対する偽らざる気持ちなのである。

いまチベットは自らの意思によることなく、中国人による経済開発によって伝統文化の土台が大きく揺さぶられているのである。

「このようなチャイナリズムと中華主義が今回のデモの背景にありはしないだろうか？」

## (二)チベット・ツーリズムの現状

筆者はこれまで永年に亘る旅行者としての経験から、数多くの種類の旅行に参加してきた。その中でも列車に乗って訪れる、「このチベットの旅は、多くの旅の中でも一、二を競うほどの魅力に富んでいる。夢を与えてくれ、創造力を掻きたて、奇想天外な魅力に溢れ、心ゆくまで旅を楽しむことが出来たというのが率直な感想である。」

「これからも一層多くの外国人旅行者にチベットを訪れて欲しいという願いが、旅行直後の新鮮な感想だった。」

しかし、「この三月中旬事態は突然急変した。早い時期にこの旅のDESTINATIONとしては魅力満載のチベットが、再び世界中の旅行者へ門戸が開放される(註：中国政府は五月に外国人のチベット入域を許可すると発表)ことを願わずにはいられない。現状では、チベットのツーリ

ズムは、率直に言って多くの課題が山積されている。これから最悪の事態を考えると鎖国状態になるかも知れないチベットには、少しでも将来を見据えて観光客受け入れの準備をしておいて欲しいというのが、ささやかな希望である。

現在チベット国内に外からの観光客を受け入れるだけの十分な条件、施設が整備されているだろうかということを考えると、率直に言ってやや首を傾げざるを得ない。

それは、これまで外の世界から隔絶されていたように、未成熟な観光行政、観光地としては不利な地勢、未整備な遠距離交通手段、ましてや旅行客を受け入れる宿泊施設となると一級設備のホテルや食事場所、バス、ガイド、道路整備状況等々は極端に不足しており、すでに需要に応えられない状態であることは明らかである。

一昨年夏青藏鉄道の開通以来、どつと押し寄せた外国人観光客は年々うなぎのぼりに増え、昨年の外国人旅行客は対前年比六〇%の四百万人に上ったと言われている。ニューヨークランドの総人口に匹敵する、この四百万人という数がチベット、或いはラサの人たちに与える衝撃は、想像を絶するものがある。

考えても見て欲しい。

全チベット自治区の人口が高々二七四万人(広島県人口二八七万人・二〇〇六年統計)、ラサ市内の人口に至っては精々三三万人程度(奈良市人口三六九千人・同統計)である。まだ観光都市がヴェールに包まれたままのチベットでは、ほとんどの外国人旅行者が省都ラサを訪れる。外人に馴れていない素朴な三三万人の人たちが、一年間に四百万人の外国人をもてなすのである。しかも毎年幾何級数的に旅行者は増えると予測されている。はつきり言ってチベット人の能力の限界を超えていると考えざるを得ない。海外から訪れる人びとの数とその存在は、現地の人びとにとつても想像を絶する天文学的な数値であると同時に、感覚的にもその存在は大きなプレッシャーであり脅威でもあるのだ。顔つきが異なり、肌の色も違い、言葉も通じず、着るものも匂いも異質な人間が自分たちの周りに徘徊し出したのでは心が休む間もない。それは彼らの想像の域を大きく超えている。

最悪の事態となった今回の外国人立ち入り禁止の扱いは、逆の意味でチベット自治区にとって、また中国政府の観光局にとつても時間的な緩衝になる機会でもある。

実際、ラサから約一七〇km離れたツェダンに宿泊した期間にも、前日まで交信出来た日本とのメール通信が急に出来なくなったり、突然停電になりエレベーターが使用不能になったり、個人的にも不都合を経験させられた。不意のハッキングの発生に、ホテルの対応は決して機敏ではなく、むしろどうしてよいか分からず動揺し混乱しているとの印象を受けた。

郊外に出れば、道路工事中で進路を変更したり、道路上が冠水していたが強引に進んだり、新しいバスが凸凹道で低床部をぶつけ修理のために、大きく時間をロスするというハッキングが続出で、あまり観光先進国では遭遇しないケースに戸惑うこともあった。まだまだハード面で解決しなければならぬ問題が山積している。

それでいて、旅行で最も大切な土地の人びとの交流では、限られた時間の中では充分その楽しさを味わうところまではいかなかったが、そのホスピタリティの片鱗には接することが出来

て、ほんのひととき癒しのときを持つことが出来たような気がする。それもこれもチベットの人たちに温かい気持ちがあつて、それに触れる刹那があつたからである。

概して、チベット国内の観光スポットには、自然のものであれ、文化的な建造物であれ、そこには訪れるべき無限の魅力と可能性が溢れている。いま地球上から失われつつある、突き抜けるような紺碧の空や、素朴ではあるが街の中心街に聳え立つ巨大なポタラ宮殿は、訪れた人々を感動させずにはおかない。チベットの、或いはチベット仏教について少しでも事前に研修しておけば深みのあるチベットの良さがより分かつてくる。街で行き交うチベットの人びとの落ち着いた優しい顔つきや、身なりは伝統的に、わが国の江戸期以前のそれに共通するものがある。それだけに、一層親しみを覚えるのである。

### (三) 将来のチベット観光

繰り返すが、現状はチベットのツーリズムはハード面で外国人観光客を受け入れ、満足させるに足る整備が充分なされているとは言えない。遠い将来のことはともかく、近未来的にはあまりにも沢山の課題を抱え過ぎている。

いまチベットは政治的、社会的には中国の省ではなく、自治権こそ与えられているが、新疆ウイグル、内蒙古、寧夏回族、広西壮族と並んで、中国中央政府に管理される自治区のひとつに過ぎない。チベット民族は、漢民族とはまったく似て非なるものである。人間(民族)の特性である、宗教、風俗、伝統、言葉、文字、などを取上げれば、民族的にも文化的にもまったく異質である。例えば、文字ですら漢字とチベット文字ではまったく異なる。青藏鉄道の列車、駅施設等の表示でさえ、三つの言葉で書かれている。重要度から表記する慣例からすれば、チベット語を第一に、そして中国語、英語と続く順序は、それだけ中国がチベット文化を評価している証でもある。だが、本音は乗客数の多いチベット民族の気持ちを慮って彼らのプライドを傷つけないためにそうしたのである。

一般的に中国人のリズムとチベット人のリズムやテンポはまるで違う。また、遅れていたチベット観光について、中国の指導力により中国式観光行政、政策を推し進めようとしているが、一見した限りではペースがまったく合っていない。中国人の指導性とか、オリエンテーリング方式ではチベット人の感覚にマッチしていないような印象を受ける。チベット観光を発展させようとの中国政府の意図は分かるが、現状ではチベット人がまだ戸惑っているとの印象が拭い切れない。チベット観光ブームは、鉄道の開通によって中国当局が考える以上のスピードでやってきた。中国としてはこの機を捉え、一気にチベットブームを固めたい。しかしながら、観光面のハード、ソフト両面でまだまだとも需要を満足させることは難しい。これから中国式観光がチベットに根付くには、相当の時間がかかるように感じられた。

その点では、今回のデモ騒乱事件でチベット観光が一時的に頓挫し、閉鎖されたことは、怪我の功名となるかも知れない。チベット観光を本物の観光ブームにして、安定して旅行者をチベットへ呼び寄せるためには、今こそやらなければならないことが沢山ある。そのための準備期間が

与えられたと考えて、外国人旅行者が訪れない、今の時期に先を考えてじっくりソフト、ハード両面の見直しと、腰を据えた観光対策を構築すべきであろう。

不幸なデモ騒乱事件ではあったが、むしろこの際将来的な視点からチベット観光を改めて精査して、新たな飛躍を期するためのプロジェクトを検討する良い機会ではないかと思っている。

## 五、デモ騒乱の微かな前兆

筆者は、チベットの専門家ではない。しかし、これまで六〇安保闘争や、ベトナム反戦運動に関わり、現実に戦時下のベトナムや、第三次中東戦争直後にアラブ諸国へ入って度々未曾有の危機に直面した。また近年に入って九・一一テロ事件の前にタリバンの巣窟近くの、アフガニスタンとパキスタンの国境・カイバル峠も探索した。これらの体験を通して一触即発の現地に流れる臨場感を感じ取り、微かに「反米大テロ」の予兆を感じた「第六感」から大胆に読み取るなら、今回のデモは起るべくして起ったと考えている。

デモはチベット独立派ら異端分子によって計画され引き起こされたと中国政府は発表した。その立場は終始一貫変わっていない。しかし、仮にデモを計画していたにしろ、代償の高くつく行為は出来るだけ慎重にして避けようと考えた筈である。今回のデモについては、むしろチベット自治区当局と治安部隊がデモを過小評価して容易に収束出来ると高をくくっていたところへ、予想外の抵抗を受け、強引な鎮圧へ進ませ、大騒擾事件へ発展させる結果になったのではないかと考えている。

いかなるデモや騒乱でもよほど追い詰められた事態にでも陥らない限り、破壊的な行動に発展することは普通あり得ない。デモを計画するにはそれなりに、リスクマネジメントを含めて入念な準備万端を積み重ねるし、或いは別の形の抗議活動を考えていたかも知れない。その予兆が一般的な視点で見えるか見えないかは分からないが、当局側には当然何らかの予兆とか、前兆があった筈である。実際中国政府はそう主張している。だが、中国政府は自らの弾圧的な行為には一切触れず、罪をすべて中国政府がチベット独立派と呼ぶ、チベット亡命政府やNGOチベット人権民主化センター、亡命中のダライ・ラマ一四世グループに責任転嫁をして、非は彼らにあると一貫して世界へ主張し続けている。

しかし、一九五一年に中国人民解放軍がチベットへ武力侵入して以来、五九年「チベット動乱」により武力鎮圧、指導者ダライ・ラマ亡命、六五年チベット自治区設定、等を経て今日まで、中国人のチベット人に対する民族的差別や、宗教弾圧、強圧的な政治的統治のあり方を見ていれば明らかかなように、中国が武力行使してチベット人民を弾圧、蹂躪し支配してきたことは、中国政府が何と弁明しようともまぎれもない事実である。

現状では、中国による厳しい報道管制、事実隠蔽等により真実は見えてこない。中国政府が世界各国のマス・メディアに対して、今日に至るもまだ但し書き付の取材しか認めないこと自体、中国政府の証拠隠滅の事実は歴然としている。中国政府がチベット民族の自由を奪い取り、チベット民族の土地を漢民族が支配するべく、遠大なプランの下にチベット人を自治区内の中心拠

点、要所から追いつき、チベットの中国化を押し進めようと考えているのは、明らかである。

これまで中国政府は自らのチベット侵略政策を、世界中の監視から隠蔽し続けて、粛々とチベット壊柔政策、さらには言えばチベット民族骨抜きプロジェクトを押し進めてきたのである。青藏鉄道の建設もその路線上にあつたと言える。だが、意に反して中国にとつて幸運をもたらさず筈であつた青藏鉄道の開通が、「パンデラの箱」を開ける結果となり、隠し通していた「中国によるチベットの虐待」と「チベット人の反中国感情」がどつと噴き出る事態となつた。中国奥地の秘め事も今や、近代文明の進化と「ミニマム」手手段の発達によつて国家の水も漏らさぬ壁を突き破り、公の場へ情報となつて流れ出て来たのである。今日では情報は、インターネットの向上により、高い精度で望むところへ届けられるようになつた。「チベット人の自由束縛と弾圧」は、もはや隠し果せるものではなくなつてしまつたのである。

筆者がひとつだけ今回のチベット滞在中に感じた、デモ騒乱事件と微かに結びつくかも知れない光景を紹介しておきたい。それは今から思えばやはり不自然で、不審な情景だつたと考えざるを得ない。

昨年十一月二十九日の昼ごろ、ポタラ宮殿の見学入場時間まで、近くで時を過してしまつた時のことである。前々から自分も一度やってみたいと思つて来た「五体投地」を宮殿前の歩道でチベット仏教徒が試みている姿を見て、見よう見真似でトライしてみた。身体の前で三度手を合わせ、大地へ伏せるように倒れるのである。周囲ではチベットの人びとが見守つてくれた。念願を果たして、ふと宮殿の壁際の駐車場を振り返つた時である。そこにはいつの間にもやつて来たのか、何と十数台の中国軍用車とジープが停まり軍用車の幌内には兵士たちがぎゅう詰めに乗つていたのである（註：ポタラ宮殿前の写真の筆者の背後に見えるトラック集団に注目してほしい）。当時のラサ市内は平時で、緊張感のようなものはまったく感じられなかつたが、だからこそ余計に平時と戦時の格差に違和感を覚え、ガイドにさりげなく尋ねてみた。「最近この時間になると彼らは休憩に「ここへ来ます」との、何と不得要領な答であつた。ガイドの言う通り、確かに軍用車は単に集団で休憩にやつて来ただけなのかも知れない。だが、それにしても世界中の観光客がやつて来る、一番目立つ場所と時間帯に、軍がトラックを連ねて集合するという事態は決して尋常な状態ではない。何か異常なことの前触れを匂わせてはいないだろうか。その時は、敢えてそれ以上追求することはしなかつたが、どうも釈然としない気持ちが残つていたのは事実である。

それから僅か三ヶ月後、「ここから程遠からぬ場所でデモ騒乱事件は勃発し、世界へ向かつて衝撃的な事件を発信するきっかけとなつた。

筆者の見たところ、浅いようであるが中国のチベット問題の根は深い。中国はいま世界中からチベット民族に対する自由と人権抑圧を非難されている。中国が自国の立場を理解してもらつたら、やや通俗的ではあるが、まず中国政府がデモの黒幕と決め付け、一方でチベット人が心から慕う「ダライ・ラマ」四世と話し合い、お互いに納得の行く解決策を徹底的に話し合うことが先決である。今のまま「聞く耳持たぬ」では、事態はこじれるばかりで永劫に両者が冷え切つた心を氷解させることは望めないであろう。そのうえで、どつしたらチベットとチベット民族の自治、文化を

護ることが出来るのかを、特に中国政府は真摯に考える必要がある。客観的にみても今日中国は、大国主義路線を歩みながら、やや金権主義に凝り固まっているように見える。この金権主義オールマイティが、チベットで長い間引き継がれてきた過去の風習とか、伝統を破壊させている大きな原因である。人の心をつなぐためには、相手の文化を尊重し、聞く耳を持つ鷹揚さが大切であることは、孔子を生んだお国柄から考えても、金権主義志向の中国人にも少々立ち止まってよく考えてもらえれば、もう少し分かってもらえるのではないかと思っている。

チベットには世界に誇れる数多くの珠玉の宝がふんだんにある。これを壊したり、失ってしまふのはいかにも惜しい気がしている。

## 六.これからのチベットの旅

今チベットへの観光は、残念ながら頓挫してしまった。これからという時にあって本当に惜しく残念に思う。すでにいくつか問題点を指摘したように、これまでと同じペースで観光客を受け入れていたら、いずれチベットのツーリズムは観光行政、観光施設、公害等の問題で暗礁に乗り上げるのは火を見るよりも明らかである。チベット入域旅行者をガラパゴス諸島への入域を制限するような視点で検討してみるのも一案であるし、ホテル等の観光施設をより整備することも求められるだろう。何よりも観光施設のハード面をリードするソフト面の整備と充実が欠かせない。また、事前に街を観光開発で荒廃させない取り組みも、今だからこそ手を打っておくことも必要である。今回のデモ騒乱事件は神が与えてくれたひとつの厳しい試練と捉え、今後観光旅行が再開される時期を、次のツーリズム飛躍への機会と考え、しばし冷静に次のツーリズム振興プランを講じておくことは決して無駄ではない。最近のチベット・ツーリズムは、予想もしなかったようにあまりにも急ピッチでやって来たからである。

いつかもう一度青藏鉄道で四〇〇〇Mの高原を走ってみたい。そのためには、その前に中国政府は「温厚なチベット人とよく話し合いお互いに納得して、各地の治安が平静さを取り戻し、街は落ち着いている」状況にしていなければならない。ここは大国・中国の大人の対応が求められていると考えている。素朴で、世界に比類のない魅力を秘めているチベットをこのまま外部に対して謝絶してしまうのは、国際社会にとっても不幸であり、訪れたいと願っている人びとの夢を壊してしまうことになる。

目をうつぐるとチヨムレートを上げたあの子どもたちのつぐらな瞳と、恥らうような可愛い素振りが目に見えんぞくくる。こつこつ旅の原点にまた触れたいと願うのは、これもまた旅好きの人間の夢なのである。